

二〇二五年度

二月二日午前入試

国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、3-1 から 3-13 まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

哲学の特徴

そもそも「哲学」って変な名前だと思いませんか？

「生物学」は、その名前を見れば、それがどんな学問か分かります。読んで字の如く、生物について研究する学問です。「社会学」も、それが社会の構造に関する学問であることは、名前から一目瞭然です。^①名は体を表すと言いますが、ほとんどすべての学問は、その研究対象が名前に冠されています。

^②では、哲学の場合はどうでしょうか。「哲」について研究する学問ということでしょうか。でも、「哲」っていったい何なのでしょう。よく分らないですよね。

「哲学」は英語で「philosophy」と言います。この名称の語源は古代ギリシャにまで遡ります。「はじめに」で述べたように、この言葉はもともと「知を愛する」ということを表していました。つまり哲学とは、知ること愛する営みを意味しているのです。

知を愛するとはどういうことでしょうか。それは要するに、何事にも「なんでだろう」と疑問を抱き、真実が何かを考えることを楽しむ、ということです。実際に、西洋の哲学の祖と言われるソクラテスは、街で行き交う人を掴まえては、「〇〇とは何だろうか」と熱心に議論をふっかけていたそうです。そうした営みから、哲学は始まったのです。

自分が知っていることは正しいのだろうか。この世界は、本当はどうなっているのだろうか——そうしたことを、ついつい考えてしまうこと。それが哲学の基本的な態度です。おそらくそれは、^③古代ギリシャから現在に至るまで、変わっていません。

もっとも、まったく何もないところから思考が始まるわけではありません。むしろ、普段「当たり前」だと思っていることに、ふと疑問が生じることによって、知的好奇心が湧いてくるのです。いつもは当然のこととして素通りしている事柄に、「あれ、でもなんでなんだろう」と思うところから、^④哲学は始まります。

このことが意味しているのは、哲学が「当たり前」——つまり常識を問い直すという特徴を持っている、ということです。

たとえば、あなたがインターネットで将棋を指しているときです。あなたの将棋の腕前は素晴らしいもので、友達と指している限りは負けたことがありません。ところが、ある日、ネット上で出会ったプレイヤーに、あなたはコテンパンに負かされてしまいます。

悔しいと思ったあなたは、対策をして再びそのプレイヤーに勝負を挑みますが、やはり勝てません。あなたから見たそのプレイヤーは、独自の戦術を繰り出し、戦いに美学を持っているようにも思えます。あなたはそのプレイヤーをなんとかして倒したいと躍起になります。画面の向こうにいるそのプレイヤーがどんな人物か、どんな個性的な指し手かに想像を膨らませます。

ところが、ある日、実はそのプレイヤーは人間ではなく、AIであることが分かりました。あなたは衝撃を受けます。あなたは、それが明らかに人間だと思えるほど、その指し筋に知性を感じていたからです。

ここからあなたは次のような疑問を抱くかも知れません。「人工知能の知性は人間よりも優れているのだろうか」と。^⑤このときあなたは哲学の扉に手をかけています。なぜならそこでは、「この世界でもっとも知性が高いのは人間である」という一つの「当たり前」が、問い直されているからです。

常識とは強制されたもの

近代の哲学者デカルト（一五九六〜一六五〇）は、「哲学は私たちがすでに知っていることを教える」と言いました。それが意味しているのは、哲学が「当たり前」を問い直すということ、常識について考える営みであるということに他なりません。

⑥ここに、哲学と科学の大きな違いがあります。科学は私たちに新しい知識を与えてくれます。新しい種類の生物や、新しい惑星を知らせてくれます。

しかし哲学はそうではありません。それは、誰もが「当たり前」だと思っていることについて、延々と考え続ける営みなのです。周りの人からは、「そんなこと誰でも知ってるわ!」と言われてしまうかも知れません。でも、その通りです。哲学は私たちがすでに知っていることについて考える学問なのですから。

⑦でも、なんで、すでに知っていることについて考えないといけないのでしょうか。なんで、常識を問い直す必要があるのでしょうか。

それに対しては、とりあえず、常識が間違っている可能性があるから、と答えられるでしょう。そうであれば、常識を問い直すことは重要です。しかし、そうではないこともあります。常識を問い直した結果、やっぱりなんだか言って常識が正しかった、という結論に終わることもあるでしょう。というか、ほとんどの場合はそうなります。でも、そうだとしたら、哲学的に考えていた時間は無駄だったのでしょいか。

まったくそんなことはありません。なぜなら、常識について問い直すことで、私たちはその常識がなぜ正しいのか、なぜそのように考えられるのかを、自分の力で理解できるようになるからです。

私たちはほとんどの場合、なぜそれが正しいのかを説明されることなく、常識を教え込まれます。子ども頃を思い出してください。大人たちは常識を教えるとき、問答無用で、「とにかく世の中はそうなのだから」という態度を取っていませんか。素朴な疑問を抱いても、回答はぐらかされなかったでしょう。私たちは自分で納得して常識を身につけているわけではありません。常識とは、半ば強制的に、私たちに押し付けられたものなのです。

強制されている、ということは、自由ではないということです。もしも常識が私たちに強制されたものであるなら、常識に従って物事を判断している限り、私たちは、実は自由に考えていないのです。

それに対して、常識を問い直すことは、それまでなぜ正しいのか分からなかった常識が、なぜ正しいのかを考えることです。そのとき私たちは、はじめて、常識に対して能動的な態度を取ることができるようになります。つまり、常識について自由に思考できるようになるのです。

⑧ここに、哲学することの意味があります。それが私たちに新しい知識を与えてくれるとは限りません。しかし、少なくとも哲学は、私たちに思考する自由を取り戻させてくれるのです。

考え抜いた結果、行き着いた答えは平凡かも知れません。しかし、哲学する前と後は違うのです。なぜなら、哲学することで、それまでなぜ正しいのかを考えもしなかった常識を、自分なりの理屈を持って説明できるようになるからです。この意味において、知を愛する営みである哲学は、同時に、自由であることを何よりも尊重する営みなのです。

なぜ哲学は「ちょっと何言っているか分からない」のか

哲学は「当たり前」を問い直す学問である——しかしそれが、哲学に独特な難しさをもたらしてもいます。

私たちはふとしたときに「当たり前」に疑問を持つことがあります。しかし、それはごく限られたときにしか訪れませんが。人工知能に関するニュースを見ても、「人工知能の知性は人間よりも優れているのかな」と本気で考え込むことは、まずありません。

なぜなら、そんなことをいちいち考えていたら、日常生活なんて送ることはできないからです。目に見えることや出会うものすべてを問い直していたら、あつという間に頭がパンクしてしまうはずですよ。

そもそも、ほとんどの場合、私たちは自分が何を「当たり前」としているのかを意識していません。次々と流れるニュースのなかで、一瞬、人工知能に関する報道がなされても、そこから「この世界でもっとも知性が高いのは人間である」という「当たり前」を思い起こす人は、ほとんどいないでしょう。

⑨しかし、意識されないということは、それが前提にされていない、ということの意味するわけではありません。ここがポイントです。私たちは「当たり前」に基づいて日常を送っているにもかかわらず、ほとんどの場合、そのことに気づいていないのです。⑩それに対して、「当たり前」を問い直すということは、そのように、それまで気づいていなかったことに、意識を向けることを意味します。

しかし、それはめっちゃくちゃ大変なことです。当然のことですが、自分がこれまで意識していなかったことを、うまく言葉で説明できるはずがありません。

そのため哲学の議論は、往々にして、「当たり前」を問い直すために特殊な言葉遣いをします。それは、日常生活で使われない言葉をわざと使うことで、日常生活を送っている限りは気づかない問題を議論するためです。そうした言葉は、抽象的であったり、堅苦しかったり、比喩的であったりします。これが、哲学の議論が一見して非常に難解に思える最大の要因です。

ふつうの人が哲学の議論を見て思うことは、「ちょっと何言っているか分からない」ということでしょう。それはその通りです。でも、なぜ分からないのでしょうか。それは、そこで語られる言葉遣いが、日常生活での用法から乖離しているからに他ならないのです。

とはいえ、安心してください。一つ一つの言葉の意味をしっかり理解すれば、哲学の議論は誰にでも理解できます。ある意味では、日常生活において交わされる曖昧なコミュニケーションよりも、哲学の議論は理解しやすいものなのです。なぜなら、そこで使われる言葉は一つ一つが厳密に定義されており、丁寧に直せば、すべての人を説得できることを理想としているからです。

⑫ 知識だけでは意味がない

知を愛する営みである哲学は、何よりも、自分自身で考えることを大切にします。それが意味しているのは、哲学の専門的な知識を学ぶことは、決して一番重要なことではない、ということですよ。

もちろん、知識が新しい思考を触発したり、加速させたりすることはあるでしょう。しかし、たとえば、昔の偉い哲学者の本を一冊読んで、その本に書かれていることをすべて暗記しても、それは大して重要なことではありません。暗記するということは、考えることではないからです。

近代ドイツの哲学者カント（一七二四〜一八〇四）は、「人間が哲学を学ぶことは決してできない。せいぜい哲学することを学ぼうというだけである」という、とても有名な言葉を残しました。それが表しているのは、哲学というすでに完成された知識の体系があり、それをそのまま鵜呑みにすればよい、という考えは間違っているということです。

あなたはもしかしたら、哲学に詳しい人のイメージとして、色々な知識をひけらかし、結局自分の意見を

押し付けているだけの人を思い浮かべるかも知れません。私もそうした人と出会ったことが何度もあります。「ソクラテスはこう言ったんだよね」とかなんとか言って、こちらの意見を頭から否定してくるような人です。

こういう人は、哲学の知識には詳しいかも知れませんが、「哲学者」ではありません。なぜなら、知識を持っていてだけでは、自分で考えているとは言えないからです。

もちろん、哲学をするために、一定の知識が必要なのは事実です。問題なのは、単に知識を持っているだけの人と、その知識を手がかりにしながら自分の力で思考している人は違う、ということです。ではその違いはいったいどこにあるのでしょうか。

私の考えでは、その違いを見分けるポイントは三つあります。

第一に、自分の言葉で説明し直すことができる、ということです。前述の通り、哲学は私たちが日常で使っているのとは異なる言葉が必要とします。しかし、それが「当たり前」を問い直す営みである以上、どれだけ専門的な議論を積み重ねた後でも、再び日常に戻ってくるのができるはずはです。つまり、それまで自分が培い、馴染んできた言葉で、自分が考えたことを言い表すことができなければならないのです。

第二に、自分自身で考えついた、適切な具体例で説明することができる、ということです。そうした例は卑近であればあるほどよいのです。たとえば、前述のカントから影響を受けたヘーゲル（一七七〇～一八三一）という哲学者は、「ミネルウアの梟は宵に飛び立つ」という、めちゃくちゃカッコいい喩えを残しています（その意味が知りたい人は調べてみてください）。しかし、これはいささかカッコよすぎます。

もっと身の回りにあるもの、誰もが見たり聞いたりしたことがあるもの、そうしたいわば「あるある」話を例に哲学が語られるとき、その人は本当に思考していると言えます。なぜなら、そうした卑近な例で説明できるということは、考えたことを日常に照らし合わせ、日常を深く問い直していることの証だからです。

第三に、どんな質問に対しても首尾一貫した回答ができる、ということです。これは応用が利く、ということでもあります。哲学をただ知識としてだけ学んでいる人には、そうした応用が利きません。

たとえばカントの哲学を全部暗記しているだけの人の対して、「カントの哲学だと人工知能の問題はどうなりますか？」と聞いても、きつと何も答えることはできないでしょう。カントは人工知能について何も語っていないからです。それに対して、カントを手がかりにして自分自身で思考をしている人は、「カントだったらきつとこう言うと思う」と、応用を利かせて答えることができるのです。

実はこうしたことは、哲学の知識を覚えるよりも、はるかに難しいことです。そしてそれは、それだけ「当たり前」を問い直すこと自体が難しい、ということでもあります。

哲学は建物の土台

「当たり前」を問い直すということ。それが哲学の営みの特徴でした。しかし、考えてみれば、どんな学問だって、多かれ少なかれ「当たり前」を問い直すものであるように思えます。

たとえば生物学は、生物に関する常識を検証することができます。私たちが、「どんな生物も自分の子孫を残そうとする本能を持つ」というのもっともらしい常識を抱いているとき、それが本当に正しいのか否かを、生物学は確かめることができます。しかし、そうであるとしたら、哲学とその他の学問の違いはどこにあるのでしょうか。

結論から言えば、その違いは次の点にあると言えるでしょう。すなわち哲学は、そうした他の学問自体が

「当たり前」とすること、いわばそこで問い直されることなく前提とされるものについても、問い直すことができる、ということですが。

どういうことでしょうか。たとえば先ほどの例を眺めてみましょう。たしかに生物学は、「どんな生物も自分の子孫を残そうとする本能を持つ」という常識を検証することができます。しかしそのとき、そもそも「本能」とは何か、ということが問い直されることはありません。あるいは、そもそも、「生物」とは何かを問い直すことができません。そうした問題にはそもそも手がつけられないのです。

「本能はこういうものだ」と仮定しよう」「生物はこういうものだ」と定義しよう」、そうした前提を設けない限り、生物学の議論は始めることができません。これに対して、「本能」とは何か、「生物」とは何か、という問いに取り組むとき、それは生物学ではなく、哲学の営みに変わります。

つまり、他の学問が議論の出発点として前提としている知識をも、哲学は考察の対象にすることができず、この意味において哲学は、日常の「当たり前」だけではなく、学問の世界の「当たり前」（＝議論の前提）をも問い直す営みである、と言うことができます。

この意味において、哲学は、あらゆる学問の基礎について考える学問である、と言うことができます。たとえば、生物学における「生物」、社会学における「社会」、数学における「数」、物理学における「物」——そのように、どんな学問にも、それについてそれ以上問うことができない概念、もっとも基礎的な概念というものが存在します。哲学はそうした基礎的な概念を問い直し、問題点を指摘し、よりよい概念のあり方を提案することができます。ここに、様々な学問が存在するなかで、哲学が果たす独自の役割があると言えるでしょう。

そしてこのことは、どんな学問でも、突き詰めて考えれば、最終的には哲学に行き着くことになる、という点でもあります。③哲学は、いわば建物の土台のようなものなのです。そうした土台をしっかりと固めないと、その上に成り立つ建築物がどれほど見事であっても、ちよつとしたことで崩壊してしまいます。そうした意味でも哲学はとても大切な役割を担っているのです。

(戸谷洋志『NHK出版 学びのきほん 哲学のはじまり』より)

※(注)

乖離

ちがう方向にそむき、離れていること。

卑近

身近でありふれていること。

問一 —— 線① 「名は体を表す」とありますが、ここでの「体」と同じ意味で用いられている「体」をふくんだ語として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 体格 イ 体制 ウ 体験 エ 実体

問二 —— 線② 「では、哲学^{てつがく}の場合はどうでしょうか。」とありますが、「哲学」という学問の名前はどのような意味を持っていますか。文中から十字以内で過不足なくぬき出して答えなさい。

問三 —— 線③ 「それは、古代ギリシャから現在に至るまで、変わっていません。」とありますが、どういふことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 何事にも疑問を抱いて^{いだ}真実を考えるために人と議論を行うという哲学における方法はソクラテスの時代から基本的に同じだということ。

イ ソクラテスが街で道行く人々に対して議論をしたことから哲学が始まったという歴史的事実は時代が変わってもゆるがないということ。

ウ 自分の知識や世界の仕組みなどについて考えこんでしまうという哲学における基本的な姿勢は時代によって変化していないということ。

エ 何もない日常生活からではなく知識や好奇心^{こうき}をもとにして思考が始まる哲学という営みは今も昔も人間を楽しませてくれるということ。

問四 —— 線④ 「常識を問い直す」という特徴^{とくちゆう}を持っている」とありますが、これについて、次の1・2の問いに答えなさい。

1 ここでの「常識」を言いかえた言葉を文中から一語でぬき出して答えなさい。

2 「常識を問い直す」という特徴を持っている」とありますが、「常識を問い直す」とはどういうことですか。できるだけ文中の言葉を使って三十字前後で説明しなさい。

問八 —— 線⑧ 「しかし、少なくとも哲学は、私たちに思考する自由を取り戻させてくれるのです。」とありますが、「哲学」が「私たちに思考する自由を取り戻させてくれる」と言えるのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 私たちが常識だと思っていることは自分で納得して身につけたものではなく、外から押し付けられたものであるため自由ではないと言えるが、常識を問い直す哲学という営みによって自由に思考することができから。

イ 私たちが日常生活のなかで疑問を抱いたとしても、常識によって自由な思考が制限されてしまうが、哲学の持つ強制的な力によって平凡な生活からぬけ出し、自分の好きなように正しさを決定できるようになるから。

ウ 私たちが物事を正しく判断するためには常識に従って思考する必要があるのに対し、哲学の世界では大人が子どもに押し付けた平凡な考え方を否定するための理屈を自分で自由気ままに作り出すことができるから。

エ 私たちが大人から常識について教えてもらうとき、大人は常識に疑問を抱いているので常識の正しさを説明してくれないが、哲学をすることで常識の正しさを理解して能動的に常識に従うことができるようになるから。

問九 —— 線⑨ 「しかし、意識されないということは、それが前提にされていない、ということの意味するわけではありません。」とありますが、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 私たちは日常的に「当たり前」を意識しながら生活しているわけではないので、常識に基づいて生きているように、実際は常識を前提にして生活しているわけではないということ。

イ 私たちは普段の生活の中で何を「当たり前」としているのか意識していないが、意識していないからといって「当たり前」が日常生活の前提になっていないわけではないということ。

ウ 私たちは普段の生活の中で哲学的思考の大切さを意識していないが、意識していないからといって哲学が日常生活を送るうえで必要なものであると言えるわけではないということ。

エ 私たちは日常的に哲学的思考の大切さを意識しながら生活しているわけではないので、哲学の意義を理解したとしても、すぐに自分の生活に役立てられるわけではないということ。

問十 —— 線⑩ 「それに対して、『当たり前』を問い直すということは、そのように、それまで気づいていなかったことに、意識を向けることを意味します。」とありますが、「それまで気づいていなかったことに、意識を向けること」の例としてあてはまらないものを次のア～オの中から二つ選び、その記号を答えなさい。

ア うそをつくことは悪いことであるはずなのに、うそをつかずに本心をそのまま話すことで、かえって友人を傷つけてしまうことになるのではないかと思つてなやむこと。

イ 科学技術の発達は人間社会の発展を表すものであるはずなのに、科学技術によって生み出された核兵器などによって人類滅亡の危機が生じていることに疑問を持つこと。

ウ 雨が降るといふ現象は小さな子どもでも知っている身近で日常的な自然現象であるが、どのような自然法則によって雨が降るのかを学んで仕組みを理解すること。

エ 目の前のテーブルの上にある赤くて丸いくだものは「りんご」であると知っているが、なぜその赤くて丸いくだものが「りんご」であるとと言えるのかと考えること。

オ 毎日学校に通うことができることに對して、災害や紛争に関するニュースを見たことで毎日学校に通うことができるというのは平和だからだと気づいて感謝すること。

問十一 —— 線⑪ 「哲学の議論が一見して非常に難解に思える最大の要因です。」とありますが、「哲学の議論が一見して非常に難解に思える最大の要因」となっているものは何ですか。できるだけ文中の言葉を使って二十文字以上三十文字以内で答えなさい。

問十二 —— 線⑫ 「知識だけでは意味がない」とありますが、筆者は「知識だけ」ではなく、どうすることが大切だと述べていますか。できるだけ文中の言葉を使って十字前後で答えなさい。

問十三 —— 線⑬ 「哲学は、いわば建物の土台のようなものなのです。」とありますが、このように言えるのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア どんな学問であっても「当たり前」を問い直すことは可能であるが、哲学以外の学問では生物学においては「生物」、数学においては「数」といったように議論の対象とする分野が定められてしまっているのに対し、哲学は分野を問わず議論の対象とすることができるから。

イ 哲学は他の学問ではあつかうことができな日常の常識の検証を行うことで、他の学問が議論の出発点として前提とする基礎的な概念を否定したり成立させたりすることが可能であり、どんな学問であつても哲学によつて定義付けをしてもらわないと議論することができないから。

ウ どんな学問であつても基礎的な概念を問い直す営みを通じて問題点を指摘したり、よりよい概念のあり方を提案することが議論の出発点となっているが、哲学だけは定義付けや仮定によつて前提を設ける必要がなく、独自の方法で自由に思考することが可能であるから。

エ 哲学は日常の「当たり前」はもちろん、他の学問が議論の出発点として前提としている知識や基礎的な概念をも問い直すことで、問題点を指摘したり、よりよい概念のあり方を提案することができるため、どんな学問であつても最終的には哲学に行き着くことになるから。

問十四 〜〜線A「たとえば、前述のカントから影響を受けたヘーゲル（一七七〇〜一八三一）という哲学者は、『ミネルヴァの梟は宵に飛び立つ』という、めちやくちやカツコいい喩えを残しています（その意味が知りたい人は調べてみてください）」とありますが、この「喩え」の意味を調べるために国語辞典や「ヘーゲル」に関する本をひいてみたところ、次のように書かれていました。なお、辞書では「ミネルヴァ」は「ミネルバ」となっており、「ヘーゲル」の「喩え」の中の「宵」は、調べた本では「たそがれ」となっていました。これらの資料を参考に、「ミネルヴァの梟は宵に飛び立つ」という言葉の説明として最も適当なものを後のア〜エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

【国語辞典】

《ミネルバ》

ローマ神話の女神。技芸・音楽・医学・教育の神。ギリシア神話の戦いの女神アテナと同一視される。

《ミネルバの梟》

ミネルバが伴っているフクロウ。知恵と技芸の象徴。

《宵》

日が暮れて間もないころ。また、日暮から夜中までの間。古代では、夜を、よい・よなか・あかときに三区分した。初夜。初更。また、よる。夜間。

《たそがれ》

夕方の薄暗い時。夕暮れ。暮れ方。たそがれどき。また、比喩的に用いて、盛りがすぎて衰えの見えだしたころをもいう。

（いずれも『日本国語大辞典 第二版』による）

【「ヘーゲル」に関する本】

※著作権上の都合により、当該試験問題の全文を掲載することができません。
必要に応じて、出典元をご確認ください。

（ルネ・セロー／高橋允昭訳『ヘーゲル哲学』より）

ア 「ヘーゲル」は哲学をかしこい鳥を意味する「ミネルヴァの梟」にたとえ、哲学は未来の予言をするようなものではなく、過ぎた時代の精神や意味を読み取り、歴史を見渡す知恵を与えてくれるものであると言おうとしている。

イ 「ヘーゲル」は哲学を教育の女神である「ミネルヴァ」が伴っている技芸を象徴した「梟」にたとえ、哲学は理想的な社会のあり方を人々に示し、人間がどのように生きていかなくはならないかという教えであると言おうとしている。

ウ 「ヘーゲル」は哲学をかしこい鳥を意味する「ミネルヴァの梟」にたとえ、哲学は現実世界を合理的に解釈する方法を与えてくれるものであるが、思考に時間がかかるために時代遅れの学問だと誤解されがちであると言おうとしている。

エ 「ヘーゲル」は哲学を技芸の女神である「ミネルヴァ」が伴っている知恵を象徴する「梟」にたとえ、哲学は灰色のように暗くてつらい現実世界を若返らせて、人々に生きる希望を与えてくれる学問分野であると言おうとしている。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 彼は社長のチイに上りつめた。
- ② けんかした友人との関係をシウフクする。
- ③ 結論が出ずに決定をホリユウする。
- ④ 名画をヒゾウする。
- ⑤ 先生の話はユーモアにトんでいる。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 妹はまだ歩けない幼子だ。
- ② 大通りの街灯がともる。
- ③ 多くの人が敬遠する仕事。
- ④ 人の弱みに乗じてはいけない。

問三 次の①～④の漢字のグループは、グループ内に示されている漢字を用いて四字熟語を二組作ると漢字が一字余ります。その漢字一字を答えなさい。

- ① 二・寒・五・石・四・温・一・鳥・三
- ② 暗・全・品・無・方・欠・正・行・完
- ③ 直・長・急・意・短・転・深・下・味
- ④ 牛・同・飲・食・異・馬・大・小・羊

問四 次の①～④の文中——線の言葉の意味を、それぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 何度聞いても、あの人の話はいぶかしい。

ア 興味深い イ ばかばかしい ウ 重々しい エ 疑わしい

② 下校中、にわかに雨が降ってきた。

ア 急に イ 強烈に ウ しだいに エ 少しずつ

③ その人はあざけるようにわたしのことを見た。

ア あわれむ イ 目をそむける ウ ばかにする エ はずかしがる

④ 先週読んだ本はすこぶるおもしろかった。

ア 少しだけ イ たいそう ウ なんとなく エ とりあえず

